

# 上賀茂地域における伝統文化の継承・発展を 目指した環境学習活動に関する研究

平成 24 年 4 月 16 日受付

勝 矢 淳 雄\*

キーワード：上賀茂地域、地域の活性化、環境学習、文化の継承、住民との協働

## 1. はじめに

上賀茂地域は平安京よりも古い伝統があり、山城国風土記には賀茂氏の定住に関する記述が見られる。上賀茂神社は、平安京遷都の際には北の守りと位置づけられた。平安京の北、鴨川の東に位置し、1300 年以上の伝統ある上賀茂地域には、上賀茂神社あるいはその神事のみならず地域には紅葉音頭、さんやれ祭、やすらい花など多くの文化的行事なども伝承されてきている。また、上賀茂神社の神官（社家）の屋敷があった明神川沿いの社家町は遅くとも 15 世紀中頃には門前集落として発達したといわれており<sup>1)</sup>、少なくなったとはいえ今でも社家屋敷が維持されている。全国的にも珍しくなり、昭和 63 年には国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され、町並みの保存がはかられている。社家町の周辺地域も平成 9 年に京都市から界わい景観保全地域に指定され、より広く地域の環境保全が意図されている。

しかし、地域の環境や地域に伝わる文化の保全・継承の努力の一方で、地域住民の高齢化・少子化などにもとない地域共同体の弱体化によって、文化的事象の維持が徐々に困難になってきているのも事実である。書の賀茂流は既に途絶えたし、六歳念仏もいつの間にか消失した。景観や町並みをはじめとする環境と文化の保全は容易なものではなく、何もしなければ現状を維持できるというわけではない。伝統文化の基本に流れる精神を理解した上で、常なる革新と創造のもとにはじめて伝統文化は維持・継承し得ることを理解しなければならない。将来に向かって、上賀茂の文化の保全・継承のためには、従来と同様の形態で親から子へ地域の従来の絆を基に引き継いでいく努力と共に、地域の文化を形のみならずその意義について新住民を含めて地域の住民の理解を新たに深め、さらには社会の認識を深める努力が必要な時期に来ている。

上記のような考えを基盤として、地域の活性化を念頭において、上賀茂の文化資産について地域の住民や社会が上賀茂地域を再認識するきっかけになることを意図して種々の環境と文化の学習活動を実施してきた。ここでは、子供たちを対象とした活動を中心にして考察する。

---

\* 京都産業大学理学部

## 2. 上賀茂地域での環境学習活動など

平成9年頃から上賀茂地域について、とくに明神川について調査を شدした。この中で、地域の方々と話をしていて気になることがひとつあった。子供達が土堀に落書きをする、明神川での魚取りで石積を緩めるなど子供に難渋していることであった。子供達が元気であれば、いたずらをするのも当たり前である。しかし、子供達を地域から排除するのではなくて、どのように地域の中に取り込み、地域の文化にも触れさせ育てていくかが大切なことである。将来、上賀茂地域の文化を継承し保全してくれるのは今の子供達であり、子供達が上賀茂の文化を知り、よい思い出を持って育てるように地域の大人がむしろ積極的に心がけ対応するべきである。しかし、上賀茂にそのような雰囲気は感じられなかったし、むしろ何もしないことがよいことのように考えているようにも見受けられた。

もうひとつ上賀茂地域で気になったことは、古くからの伝統行事のみならず、今も古くからの生活に根ざした、いわば生活文化が伝わっているが十分には記録されていず、高齢者世代の減少にともない急速に失われだし分からなくなってきていることであった。

このようなことを背景に、上賀茂地域で種々の地域活動をはじめることとなった。研究で地域にお世話になったのであれば、出来ることがあれば地域に貢献することもしなければとの気持ちがあったからである。上賀茂地域は古くからの伝統があり、かつ社家には古文書が多く残されている関係で研究者が多く訪れるが、住民の間では研究者は地域を利用するだけ、あるいは古文書を借りていったきり返さないなどとして大変評判が悪いことを聞いていたこともある。最近でも、ある家が建て替えの際に大量の古文書を焼却してしまったとの話があり、「どうせ学者先生に利用されるだけだから」との話だったとのことである。

### 1) 上賀茂地域の生活と文化の記録づくり(聞き取り調査)<sup>2)</sup>

平成9年度から11年度に聞き取り調査を行い、(財)大学コンソーシアム京都から京都地域調査活動助成金を受け2冊の報告書<sup>3,4)</sup>を作成した。上賀茂といえば葵祭や競馬などの古くからの伝統行事のみが注目され研究されているが、消失しかかっている古くからの生活文化も今記録しておかなければ2,30年先にはわからなくなってしまう恐れがある。明治時代どころか既に大正時代のことが分からなくなっている。

### 2) 散策マップの作成

住民への聞き取り調査の時に、上賀茂を案内するパンフレットのようなものがあつたら、上賀茂を訪れる人に便利なのではないかとの話があり、これを受けてゼミの学生が散策マップを作成した。平成10年度から配布し、初期は多くの場所に置かせてもらったが、作成部数の関係もあり現在は改訂を加えながら今井食堂のみに置かせてもらっている。

### 3) 小学生の社家屋敷と明神川の見学会(後述3-1)

### 4) 明神川の川底低下の指摘と修復支援<sup>5-7)</sup>

明神川の歴史的研究を進める中で、明神川の川底が低下していることに気付いた。このことに関して、地域住民と話をしたが一部の住民は事実を認識していたが、その対策に関しては何らかの動きも

出来ずに手をこまねている状況であった。上賀茂自治連合会は平成13年度に市に要望書を提出したが採択されなかったと言うことだったので、平成14年度の要望書について幹部に話をし、写真と市への要望書案を提供した。これにより平成14年度に市によって川底修復がなされた。

5) 日本泳法の小学校での模範演技の実施(後述3-2)

6) カキツバタ保全基金の設立

大田神社のカキツバタは、昭和14年に国の天然記念物に指定されているが、その維持には大変苦労している。昭和30年代には一時消滅の危機にもあった。現在では、人の手を加えなければ保全できない状況である。そのことへの理解を深めてもらうために、平成14年にカキツバタ保全基金を設立した。梅辻家の公開など種々の行事の際に募金箱を置き、寄付をお願いしている。

7) スグキナの講演会

上賀茂地域の住民との交流の場を作るために本学の山岸博教授にお願いして、平成14年10月23日に同窓会館でスグキナの講演会を開催した。33名の参加者があり、種々の質問も出るなど盛会であった。

8) 社家屋敷の特別公開(後述3-3)

9) 非公開社家屋敷の見学会

上賀茂社家町への社会の理解を深めるための一環として、平成15年から京都市指定文化財のI家をお願いして、季節の良いときに不定期に特別の見学会を行っている。

10) 賀茂文化研究会の設立(後述3-4)

11) シンポジウム「上賀茂の文化を語る」の開催<sup>8,9)</sup>

上賀茂地域には多くの文化的事象があるが住民もあまり詳しくない状況にあるので、他の地域の人達とも理解と知識を共有するために上賀茂の行事などについてのシンポジウムを平成15年から開催した。平成16年の第2回目「京都の盆踊りと紅葉音頭」で特別講演とパネルディスカッションにパネリストとして参加した京都嵯峨芸術大学客員教授の山路興造氏は次のように述べた。「このシンポジウムに大学が関与していないのは大変残念である。大学は地域との連携が求められている。地域文化に大学が貢献することは全国的に進められている。上賀茂は多数の民俗芸能や地域文化財が残されている。この上賀茂文化に、大学を核とした地域との一体化した活動が大切なときである。」と強く語った。社会に先駆けて発展するためには、何事によらず時代の先を見る目が不可欠であるが、当時の京都産業大学はシンポジウムの意義にまったく関心もなく理解もできない状況であった。平成18年の第4回は、シンポジウムに好意的であった大谷大学で開催した。毎回、上賀茂の住民など200名以上の参加者があったが、賀茂文化研究会の上賀茂地域での認知度を高めるといふ初期の目的の一つは十分に達成したことと、経費と人手の問題で継続は困難で中止した。

12) 火星の観望会(後述3-5)

13) 会誌「賀茂文化」の発行<sup>10)</sup>

平成16年より賀茂文化の普及と保存のために賀茂文化研究会の会誌「賀茂文化」(約100頁)を年1

回継続して発行し会員や府立資料館などの主要施設に配付している。平成24年で第9号になる。

14) テントウムシの観察会(後述3-6)

15) 七夕祭の復活

平成17年度に賀茂文化研究会と上賀茂神社との主催で、百数十年ぶりに七夕祭を復活させ、上賀茂探検クラブ、京産大馬術部などとも協力して新たな装いで実施した。毎日新聞(平成17年8月14日付)には「…今年、賀茂文化研究会や上賀茂神社が中心となり、人々に楽しんでもらえる行事で地域を盛り上げようと再興。…」と書かれている<sup>11,12)</sup>。しかし、詳しい経緯は省くが種々の外乱があり、18年度から手を引いたところ、数年で開催されなくなった。悪い方向に事が動いたが、これも基本的には人の問題である。何か行事をやれば人が来てくれるという訳にはいかないもので、永年にわたり地域の住民との人間関係を築いていかなければ人は参加してくれないのである。

16) 上賀茂文化フォーラムの開催支援

北消防署と上賀茂町並み保存会などが共催で行なっていた文化財防火研究会が廃止になったが、住民の防火意識の向上のために上賀茂町並み保存会が始めた上賀茂文化フォーラムに講師の紹介、会場の設営などを支援することとなった。文化財防火研究会が廃止になったのは、消防署の熱心な署員が退職したことによるもので、人が組織を動かしていることを如実に示す例である。

17) 賀茂季鷹歌碑建立(後述3-7)

18) リレー講義「上賀茂の文化を学ぶ」の開講(後述3-8)

19) 北大路魯山人人生誕地石碑建立(後述3-9)

20) 糺の森自然観察会(下鴨地域)(後述3-10)

21) テントウムシの観察会(下鴨地域)

賀茂文化研究会の活動を下鴨地域に拡大するために、平成19年に下鴨神社を訪ね、広報担当の神職の方と話をした。糺の森での活動を全面的に支援するとのことで、平成20年度にテントウムシの観察会と上記の糺の森自然観察会や下記の写真教室、水質調査、ドングリを食べようの5つの行事を計画した。ところが、平成20年度に担当者が変わり、神社としては行事への協力は一切出来ないとのことになった。そのため、糺の森自然観察会以外は、種々の負担が大きすぎるので平成20年度の1回のみで中止した。神社の担当者という人の問題である。

22) 糺の森子供写真教室(下鴨地域)

平成20年は糺の森で、平成21年は御所で、平成23年からは植物園で実施している。カメラの台数によって制限されるので一般公募は行わず、ガールスカウトと児童福祉施設・迦陵園の子どもたちを対象に実施した。平成22年は準備をしていたが、迦陵園の施設長が変わり引継ぎが出来ておらず、さらに新施設長から「最近は多くのところから申し出があるので」との婉曲な断りがあった。前施設長からは、「子どもたちは自分の撮った写真をお互いに見せ合って大変喜んでます」との手紙をもらっていたので残念であった。ガールスカウトは、子どもたちの写した写真を焼き付けて渡しても何の反応もなく、喜んでもらっているのか迷惑と感じているのかまったく分からないもので声を掛

けるのを止めた。平成 23 年からは葵小学校の児童を対象に植物園で実施している。参加人数が制限されるために一般公募は困難である。葵小学校に声を掛けたのは、子どもたちとの仲介をしてくれている葵小学校のおやじの会の H 氏が糺の森自然観察会などに積極的に協力してくれていることから、写真教室でも声を掛けたものである。どの様な行事でも子どもたちを集めるのが難しいわけで、仲介してくれる人が熱心でない子どもたちを集めるのは困難である。植物園で実施する大きな理由は、撮影対象に恵まれていることと車の通行がなく安全の確保が容易なことである。

#### 23) 糺の森の泉川などの水質調査(下鴨地域)

子どもたちの関心は高く子どもたちだけでも 40 数名が集まったが、準備が大変であり、また試験薬とアルバイトなどの人件費などが高額になることと、水質試験薬の K 社にも 2 名のボランティアをお願いしたが、それでも専門知識を有した指導者の確保が難しかった。子どもたちからの評判も良かったが、神社の協力が得られない状況での継続は負担が大きすぎ困難であったので平成 20 年で終了した。ガールスカウトからの要望があり、平成 20 年に再度実施した。

#### 24) 糺の森のドングリを食べよう(下鴨地域)

平成 20 年の秋に実施した。関心を呼んで、51 名の子どもたちと保護者 11 名の合わせて 62 名が参加した。それまでに集めておいたツブラジイやスタジイ、ギンナンと御所で集めておいたマテバシイをガールスカウトの協力を得て煎って食べた。これも神社の協力が得られなくなったので終了した。

#### 25) 下鴨地域の紅葉音頭の復活支援<sup>13)</sup>

下鴨地域の紅葉音頭は、御所音頭・紅葉節というがルーツは上賀茂地域の紅葉音頭と同じで御所で踊られたのに始まる。下鴨地域の紅葉音頭は一旦途絶えたのが復活したが、平成 19 年に音頭取りの高齢化で再度途絶えた。その後、様子を見ていたが復活の兆しが見えないので、平成 21 年に賀茂文化研究会として支援に乗り出した。それまで、接触を続けていた T 氏との話の中から、下鴨地域で紅葉音頭に関心のある S 氏が見つけた。上賀茂地域の紅葉音頭保存会にお願いして、S 氏などを上賀茂の紅葉音頭の練習に参加させてもらったりして、再び組織を構築することができた。下鴨地域には踊り手の方は大勢いたが、女性ということであろうか前会長が認めてくれないために復活ができていなかったが、S 氏が対応したので一切の書類、テープなどを譲り受けることが出来た。平成 22 年 8 月に 3 年ぶりに復活した紅葉音頭は、上賀茂紅葉音頭保存会からも音頭取りの応援をもらい、数百名の住民が集まった。みんなが紅葉音頭の復活を待ち望んでいたことがわかった。上賀茂地域の紅葉音頭との交流も始まった。リーダーが見つかったので、今後の継続にも問題はない。著者が両地域に人脈があったことによって可能となったもので、人の繋がり的重要性が認識できた。

#### 26) ジュニア上賀茂検定の実施(後述 3-11)

#### 27) ジュニア下鴨検定

かつて子どもたち向けの下鴨風土記<sup>14)</sup>を作成したお母さん方とのコンタクトが取れ、協力してもらえる体制ができた。平成 24 年から問題を作成しだしている。下鴨地域の場合は、具体的に問題や解説を作らないと小学校なども対応してくれないと考えられるので、まず問題作りからはじめた。まだ、

始まったばかりである。

その他、種々のことで地元と協力してきている。環境学習活動を中心に以下に述べる。

### 3. 環境学習活動を中心として

#### 1) 小学生の社家屋敷と明神川の見学会<sup>15~18)</sup>

京都新聞(平成11年11月25日付)に「落書きに泣く社家の土壁」<sup>19)</sup>として、落書き問題が掲載され、その後、他の新聞、テレビでも大きく報道されることとなった。必ずしも子供達による落書きだけではないが、このような事が起こる背景には上賀茂地域でも大人も子供も上賀茂の社家町が国の伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)に選定されていることの価値について十分には認識していないことにあると考えられた。社家屋敷の外観は見る事が出来るが、内部を見学させてもらったこともなく、小学校などで教えてもらえるわけでもない。何が社家屋敷の特徴か、いかに大切にしなければならないかも知らないのが現状であった。社家屋敷も親しく見学させてもらえれば、地元である社家町にも自ずと愛着も芽生えてくるものであり、社家屋敷の土塀なども大切にしようとする気持ちも育ってくるものである。特に、次代を担う子供達には社家の様式の意味などがたとえ理解が難しいとしても、地元の事物によい思い出を残してもらうことが現在および将来の地域の環境保全に大切である。

このような考えから、平成13年度に初めて子供達を対象とした見学会を開催した。子供達との接点がなく子供達を集めるのに苦労したが、地元の方々の協力で何とか実施することが出来た。しかし、余計なことをはじめたというわけで、地元にはあまり評判はよくなかった。たとえば、「ここはなにもしないところ。伝建地区では町づくりはしないとの申し合わせがある。」と、上賀茂の長老の一人のK氏から苦情を受けた。何もしなければ地域の環境は守れるとの誤った認識が、社家町を荒廃させ、落書きだらけの状況を作っていたわけであり、今に至るもこの誤った認識が上賀茂の保全に大きなマイナスとなっている。しかし、これに懲りずに平成14、15、16年度と継続した。「見学させてもらったお宅の土塀に落書きをする子供はいない。」「子どもたちを育てずに、将来の上賀茂を誰が守っていくのか。」などと理解を求めた。地元の関心も呼び、上賀茂小学校の保護者と子供達の自由活動である上賀茂探検クラブとも関係が出来るようになった。平成17年度からは上賀茂探検クラブの主催の形で行い子供達20名が参加し、形式的には勝矢研究室は協力をする形とした。京都新聞などが最初から注目し記事にしてくれている<sup>20~27)</sup>。この活動が全てを進めたとは言わないが、平成24年4月でもかつて落書きだらけであった土塀も現在は落書きひとつなくきれいなままに保たれている。

ところが、上賀茂探検クラブを熱心に主導してきたリーダーの人が代わり、さらに郷里に帰ることとなって上賀茂探検クラブはリーダーを失いほぼ消滅し、この見学会も現在は行なわれていないが、「社家屋敷の特別公開」に趣旨は引き継がれている。有能なリーダーがいなくなれば、とくに小さな組織は継続できないわけで、これも人の問題である。

#### 2) 日本泳法の小学校での模範演技の実施<sup>7)</sup>

かつては、森林であった上賀茂神社の境内に灌漑用の小池(現在はゴルフ場の中になる)がある。上

賀茂の子弟の水泳教習のために、踏水会で水泳を教えておられた岩崎六郎氏が昭和2年に招かれ、上賀茂游泳術講習所を開所された。以来、小堀流踏水術を基本として各流派の泳法もとり入れた日本泳法が引き続き教えられ、現在は六郎氏の子息の永氏が指導を続けている。上賀茂地域で50、60歳代以上の人達はここで水泳と行儀作法を習うのが普通であった。2キロ以上離れた下鴨地域からも習いに通っていた子供達も多くいた。小池の日本泳法は小学校や民間のプールの整備、少子化などで習いに通う子供達はだんだんと少なくなってきているのが現状である。既の上賀茂が次代に積極的に伝えていくべき文化の一つとなっている。

岩崎氏の快諾を受けて、平成14年度は西賀茂の待鳳小学校で模範演技をしてもらった。横方向への泳ぎや後ろへの泳ぎなど日頃知らない泳ぎ方に子供達からビックリの「オー」という声があがるなど好評であった。偶然のことであるが、待鳳小学校長がかつて下鴨地域に住んでいて、小さい頃に小池に水泳を習いに行っていたということですぐに目的を理解してもらえたことも実現できた大きな理由と言える。上賀茂の文化の継承に現在が如何に重要な時期であるかが理解できる。平成15年度は柘野小学校でプールの新設行事として実施でき約150名の児童が見学した<sup>28)</sup>。模範演技の後、子供達に実際の日本泳法を体験してもらった。平成16年度からは上賀茂探検クラブに移行し上賀茂小学校で実施され、今後の世話をお願いしたが、やはり上賀茂探検クラブの衰退で途絶えた。

### 3) 社家屋敷の特別公開<sup>27)</sup>

社家屋敷の見学が大人に関心が高いことは子供達の見学会で分かっていた。また、社家屋敷に社会の理解を求めていく活動が社家屋敷のみならず今後の社家町の保全のために必要であることから、平成14年度に梅辻家をお願いして1日だけ特別公開を実施した。

明治時代に神社が国家管理になるまで、上賀茂神社においても、神職は代々世襲制で1200年以上にわたって引き継がれてきた。神職を引き継ぐ家筋を社家といい、上賀茂では賀茂16流といわれる家筋があった。社家のなかでも特に神主に任ぜられるのは賀茂七家といわれる家筋だけであった。梅辻家はその賀茂七家の一つで、世襲制最後の神主を務めた社家である。梅辻家は、このように神主系として社家の中でも格が高かったこともあり、梅辻家の社家住宅は、御所のご学問所を移築したものと伝えられており、通常の社家住宅の様式を備えているだけでなく上賀茂でも特に格式の高い建物である。昭和61年には京都市指定有形文化財に指定されている。天保9年(1838)頃にはほぼ現在の形になっていたと推定されている<sup>1)</sup>。

特別公開は最初のことであり現在居住しておられる住居の公開であったことや、従来の経緯もありこのような試みに対する地元の反発も懸念した。さらに、どの程度の見学者が来るかもわからず当日の混乱や大小のトラブルの発生も心配された。結果として、トラブルもなくかつ盛況に終了できた。177名が見学を訪れた。しかし、その後の公開では制止を聞かずに無理やり立ち入り禁止にしている所に入る人がいるのも残念ながら事実である。

社家の公開が初めてであったことから社会の反響も大きく、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞および京都新聞の各紙が記事に取上げてくれた<sup>29-32)</sup>。とくに、京都新聞は7段の特集記事を組み、今回の特

別公開が上賀茂の文化を地元をはじめ広く社会に知ってもらい、社家町の保全・継承につないでいきたいという意図、さらに社家が抱えている相続や維持管理の困難さなども紹介してくれた。

平成 15, 16, 17 年度と続けているうちに、社会に広く知られるようになって<sup>33-35)</sup>、年間に何度も学会や国際シンポジウム、種々の行事にも見学を申し込まれたり、自治会はお盆にライトアップを依頼するなどの公開が増えた。平成 18 年 2 月には文化庁長官の河合隼雄氏も訪れた。初期の目的は十分に果たせたと考えている。現在は、梅辻家が引き続き公開を行なっている。

#### 4) 賀茂文化研究会の設立

上賀茂地域の地元住民が地元の自然・文化について関心を持ち、地元についての研究を進めるため、さらには子どもたちへの環境学習を進めていくためには、そのためのキッカケづくりとその実現のための組織づくりが必要であった。トヨタ財団が「近代化とくらしの再発見」というテーマで地元住民を主体とした地域研究を助成することが分かり、上賀茂での活動が内容的に合っていることからこれに応募することとした。地元の方に声をかけたところ賛同がえられた。手分けして声をかけ、地元の 3 つの団体を中心に共同研究者を構成することができた。さらに、これを母体にして広く上賀茂の文化に関心のある人と、地元の種々の代表者、たとえば上賀茂神社宮司、社家の集まりである賀茂県主同族会理事長、上賀茂自治連合会長などを顧問として「賀茂文化研究会」を平成 15 年に発足させた。地元での文化の保全・継承と研究を進める体制を整えることができた。従来、京都産業大学勝矢研究室で行ってきた事業も引き継ぐこととした。

地元からも大きな期待が寄せられているという手ごたえを感じる事ができた。京都新聞が新たな地域活動として注目してくれた<sup>36)</sup>。会員 35 名で発足し、現在百数十名の会員を擁している。しかし、未だに組織面、資金面などで基盤がまだ十分に確立するには至っていないのが現状である。種々の行事は、組織が出来たのでやりやすくなった。平成 19 年から下鴨地域へ、平成 22 年から全国の賀茂地域への展開をはじめた。

#### 5) 火星の観望会<sup>37)</sup>

平成 15 年の火星の大接近にあわせて子ども達に火星を見せようとの話が賀茂文化研究会で起こり、地元との交流を推進するという点および子供たちが興味を持つだろうということで実施することにした。上賀茂探検クラブと連携し上賀茂小学校の講堂と運動場を利用して火星の話と観測会を 8 月 21 日に実施した。火星が見られるのが午後 8 時過ぎになること、また多数の参加者があると予想されることから事故が一番の心配であり、不特定多数となることからレクリエーション保険の適用も難しく、必ず保護者が責任を持つことを周知徹底することとした。また、警察にも連絡した。子供と保護者で 228 名の参加者であった。天候の加減でやっと午後 9 時から観測ができるようになったが、火星の観望が始まるのが遅かったため小学校の利用限度の午後 11 時も過ぎても終わらなかったが黙認してもらい、後片付けが終わったのが午前 1 時前であった。専門を外れることで地元の専門家以外は大型の望遠鏡が扱えないなど困難な点もあったが、地元の多くの方に喜んでもらい、後日にも地元の方からよかったとの話を聞いた。平成 16 年は月のクレーターの観望会を同様の形式で行った。地元の専門



家からは継続したいとの申し出があったが、度重なる望遠鏡のトラブルへの対応が他のものでは出来ないため協力を辞退した。

#### 6) テントウムシの観察会<sup>38)</sup>

和牛の専門家である京都産業大学の野村哲郎教授が一方で、上賀茂地域を含め全国のテントウムシの種類について、その分布状況を調査している。気温変化によって優先種が異なってくるのがわかっており、40年前に調査したデータがあり、それと比較・検討をしている。上賀茂地域でもかつてより温暖化の傾向にあることが、テントウムシの観察からも明らかになってきた。テントウムシが子供たちにも興味ある対象であり、さらに温暖化と結びつけて話も出来ることから、野村教授の快諾を受けて、子どもたちの観察会を上賀茂探検クラブに持ちかけた。

上賀茂探検クラブが主催し、指導を野村教授と野村研究室の学生が行い、平成17年5月14日に実施した。子供達24名と保護者16名の参加があり、飼育などの指導も行い好評裡に終了した。上賀茂探検クラブと研究者をうまく結びつけることができた。上賀茂探検クラブの保護者からは、どこにどのような専門家がいて協力してもらえるかの情報がなかなか得難いとの話もあったこともあり、このような結びつけをすることも大切である。たまたま、観察会に桃山高校の先生が保護者として参加しており、この先生からの要望で、平成18年度からは京都産業大学と京都府立桃山高校との高大連携行事に発展し、継続して実施されている。

#### 7) 賀茂季鷹の歌碑建立<sup>39,40)</sup>

上賀茂地域では地元が輩出した人物を顕彰することが従来行われておらず、賀茂季鷹に限らず、誰の顕彰碑なども存在しなかった。過去、色々な話が出されたようであるが、利害の対立などから実現することが出来なかった。たとえば、顕彰されるような業績のある人物は当然のことながらそのほとんどが社家出身である。一方で、現在上賀茂で上賀茂自治連合会など各種団体を実際に運営しているのは農家が主体であり、未だに社家への遠慮と反発は根深いものがあり、なぜいまさら社家を顕彰するのかとの反発の声はすぐに聞かれるのが現状である。賀茂文化研究会は、賀茂季鷹の歌碑の建立を計画し、賀茂文化研究会のメンバーが京都市に相談したところ前向きな回答が得られたので、京都市と賀茂文化研究会とで協議をもった。後日、歌碑建立を地元へ提案し、京都市と地元の方々もまじえ候補地の現地調査を一緒に行った。京都市から出された大きな条件は、候補地が何らかの形で公的性格をもっていることと、地域住民の全員の賛成が得られていることであった。

賀茂季鷹の旧宅である山本氏(季鷹の本姓は山本)宅は、京都市が平成9年に指定した上賀茂郷界わい景観整備地区の界わい景観建造物に指定されていることから京都市の了承が得られた。第2の住民全員の賛成については、上賀茂の主要団体に順次声を掛け、これらを網羅した歌碑建立委員会を設立し、その賛成をもらうことにした。平成17年8月9日に第一回の賀茂季鷹建立委員会を開催した。構成メンバーは、上賀茂自治連合会、上賀茂社会福祉協議会、上賀茂町並み保存会、明神川美化保存会、賀茂文化研究会である。ここでも種々の意見が出されたが、最終的には全員の賛成が得られた。これによって京都市の了解も得られ、地元をはじめ社家の集まりである賀茂県主同族会や、賀茂文化

研究会会員に募金活動をはじめることとなった。京都新聞が大きく取り上げてくれた<sup>41)</sup>。

平成 18 年 4 月に京都市の助成も決まり、募金も順調に協力が得られた。平成 18 年 8 月に第二回の建立委員会を開き、それまでの報告と建立場所、時期などの最終決定をした。

平成 18 年 9 月 28 日に完成式を現地で執り行い、平成 18 年 10 月 7 日には歌碑建立を記念してシンポジウム「上賀茂の文化を語る」(第 4 回賀茂季鷹とその時代)を大谷大学で開催した<sup>42)</sup>。上賀茂地域内外の多くの方々のご好意によって、無事歌碑の建立が出来たわけである<sup>43)</sup>。

歌碑建立が単なる過去への郷愁ではなく、上賀茂の地元の方々が地元の歴史と文化を知るキッカケとなり、上賀茂に愛着と誇りを持ってもらうための大きな一歩となることが期待される。また、上賀茂地域内外に上賀茂の文化を発信するための新たな礎<sup>いしづか</sup>となり、賀茂文化の保全・継承と賀茂文化の新たな創造の始まりとなることが期待される。

歌碑建立については、農家の反発については「たまたま季鷹は社家であったが、社家だから顕彰するのではない」と説得し納得してもらえたが、一方で社家の団体である賀茂県主同族会(以下、同族会)の副理事長 K 氏からは執拗かつ陰湿な妨害を受けた。自分に最初に声がかからなかったことが不満であったようであるが、再三の説得にも「よそ者(著者のこと)と勝手なことをやっていると天罰が当たるぞ」と建立委員会委員長や協力した社家の人への嫌がらせが続いた。そして、同族会は上賀茂神社と連名で神社の一の鳥居前に季鷹顕彰の駒札を建てた。社家と農家の潜在的な対立を顕在化させた点もあるが、実際にはある社家個人の問題である。同族会の副理事長という立場にあったので、見かけ上は社家と農家の対立のようになった。このような理不尽かつ協調性のない姿勢が社家全体が地域住民から嫌われ、敬遠される原因の一つであるし、上賀茂は人間関係の難しいところと社会から敬遠されている理由の一つでもある。この副理事長は、反対した歌碑建立の除幕式には何食わぬ顔をして最前列に並んでいた。自分が執拗に反対していたことを社家以外の地元の人達には知られたくなかったのである。悪い意味での人の問題であり、これが上賀茂で地域の活性化の取り組みを地元の住民をはじめ多くの人が避けて今まで出来てこなかった理由である。多くの人たちは、陰湿に恨まれてまで上賀茂のことをしようとは思わないのは当然である。

#### 8) リレー講義「上賀茂の文化を学ぶ」の開講

広い社会もあるいは狭い地区においても、それぞれ種々の事柄が相互に関連しあいながら総合的に日々の生活が営まれ、伝統文化の保全・継承をしてきている。ある町を知るにも多くの専門分野からその町の特徴をよく知り理解しなければ本当の姿は見えてこない。

学生にとっては京都産業大学の位置する上賀茂、地元住民にとってはその居住する上賀茂、そして一般の人々にとっては古くからの伝統文化のある町・上賀茂について、それぞれが賀茂の文化を学んで理解を深め、実際に訪れることによって愛着と誇りを持って明日の上賀茂を考えてもらえることを期待して、平成 18 年度に京都産業大学に新たにリレー講義を開講した。上賀茂のことだけではなく、上賀茂について学ぶことを通じて、将来の自らの生活の場における町のあり方、町づくりに関心を持ち、よき住民として行動する意識を培うことを期待して始めたものである。賀茂文化研究会のほか、

同族会、上賀茂自治連合会および賀茂別雷神社が後援している<sup>44)</sup>。大学と上賀茂を結びつけ、学生の大学の地元・上賀茂への関心と愛着を呼び起こす試みであったが、大学の都合により平成24年度で閉講となる予定である。大学の存在する地元への社会貢献と言うことがまったく理解されていないであろう。

#### 9) 北大路魯山人生誕地石碑の建立<sup>45~47)</sup>

北大路魯山人は上賀茂の生まれであるが、一部の人を除いて地元の人たちにも知られていなかった。賀茂季鷹歌碑建立の会議の中でも、次は北大路魯山人だとの話をだして、みんなも了解していた。ところが、このことが同族会前副理事長の社家のK氏に伝わったために季鷹歌碑以上に陰湿な反対がなされた。とくに、季鷹歌碑建立委員会委員長と協力した社家のU氏には、執拗に嫌がらせが続き、遂に委員長とU氏から今回(魯山人)は降ろしてほしいとの要望が出され、手を引かれることとなった。魯山人の顕彰はどうしても阻止したいということでの執拗な嫌がらせは季鷹歌碑のときをはるかに上回るものであった。この時点では、K氏は既に同族会の副理事長も顧問も退任されていたこともあり、同族会や社家の人たちは著者の依頼によって無理を承知でK氏の説得に手を尽くされたが、やはり説得は出来なかった。K氏のことは、K氏が社家であるため農家はまったく手を出すことが出来なかった。著者は北大路魯山人の長女の北大路和子氏と接触し、石碑の建立に感謝の手紙をいただいていたが、K氏の説得に2年間を費やしたために、この間に和子氏が亡くなられてしまった。痛恨の極みであった。

K氏は北大路魯山人について色々悪口を並べて反対されていたが、K氏は上賀茂小学校に北大路魯山人の生家が記された古地図を自分が発見したかのように自身の大きな名前入りで寄贈され、小学校のふれあいサロンに飾られていた。すなわち、K氏は北大路魯山人を顕彰することに反対なのではなく、本質は自分が上賀茂の大將として差配できないことへの反対なのである。

K氏への誠実な長期にわたる対応は魯山人顕彰の賛同者の方には理解が得られ、そこまで手を尽くして説得したのならよいのではないかとの認識となった。反対者への懇切丁寧な説得は、賛成者の理解を得るために大切であった。従来であれば社家の人一人でも反対すると他の社家の人たちは見て見ぬ振りをするし、農家は社家の人には話すら出来ない状況であるので、事を荒立てないために何も進めることが出来なかった。これが上賀茂の現実であった。著者が同族会理事長の賛同も得たことから魯山人顕彰が具体化することとなった。

北大路魯山人没後50年にあたる平成21年3月に大田神社の撰社・福德社の横、生家と同じ町内に北大路魯山人生誕地石碑が建立できた。北大路魯山人の孫の北大路泰嗣氏家族や門川大作京都市長、府・市議員など160余名の参加者で盛大に除幕式が挙行された。社家の集まりである賀茂県主同族会と農家主体の上賀茂自治連合会が連名で建立者として名前を並べるという上賀茂地域はじまって以来の画期的な出来事となった<sup>48~50)</sup>。しかし、これ一つによって明治以来百数十年続く社家と農家のわだかまりが解消することはありえない。

経費は、賀茂季鷹歌碑建立の寄付金の残額で充当できた。しかし建立後の委員会で、ある農家の委

員から「自分たちは金を出すだけで、何の金儲けにもならない。」などとの発言が公然とあり、唾然とせざるを得なかった。文化的事業の価値は口で説明しても分かるものではなく、自身の教養で理解されるべきものである。戦後の農地解放によって農家は経済的に豊かになったが、文化を理解するにはまだまだ時間が必要なのであろう。なお、季鷹歌碑の寄付金はその大半が社家の人たちによるものであって、農家の人たちの寄付はほんのわずかであった。

現在、賀茂季鷹の歌碑と北大路魯山人生誕地石碑は、多くの上賀茂地域の観光案内で紹介されている。

#### 10) 糺の森自然観察会(下鴨地域)

平成19年から下鴨神社の糺の森を活かした観察会を始めた。子どもたちでもわかる樹木などの図鑑の作成に難渋したが、何とか良いアイディアがでた<sup>51~53)</sup>。下鴨神社の新木直人宮司からも、このような図鑑は必要だとの話は以前からあったが誰も作れなかったと言われ、序文を書いてもらった。その後、観察会の参加者からも大変好評である。糺の森の樹木は専門的な立場からの研究はなされているが、子どもたちをはじめ一般の人たちの理解を深める活動は行なわれていなかった。毎回、子どもたちだけで40数名の参加者があり、継続して開催している。平成24年度からは、付属高校の米澤信道先生にバトンタッチした。

糺の森の隣接学区である葵小学校は、おやじの会のH氏が熱心に協力してくれるので、葵小学校からは毎年10数名の参加者がある。一方、地元の下鴨小学校には対象児童に数百枚のチラシを配付してもらいが毎回数名の参加者しかなく呼ぶ掛けを中止した。糺の森が地元にあるので返って興味を持たないということもあるだろうが、チラシを配付するだけでは子どもたちは集まらないもので、子供たちに熱心に呼びかける人が必要なのである。やはり、協力してくれる人の問題である。その他、京都市が市内の全小学校などに配布している冊子「Go Go 土曜塾」に掲載してもらい、参加者を募集している。

#### 11) ジュニア上賀茂検定<sup>54,55)</sup>

賀茂学検定を始めようとしたが困難となったので、上賀茂地域でまずジュニア上賀茂検定をはじめることとした。将来的には、下鴨地域を含め全国の賀茂地域を対象にした検定を目標にしている。平成20年に地元にて提案して、平成22年度に上賀茂小学校の賛同を得て実現できた。4月から3年生の子どもたちが実際に上賀茂地域に入り興味を持ったり疑問に思ったことをメモした。それを基に、地元として子どもたちにどうしても知ってもらいたいことを加えた15地点を選定し、写真と説明文、質問を作成した。7月に15地点を回る上賀茂発見ラリーを実施した。子どもたちはもとより、参加した保護者、協力した地元の方々にも大変好評であった。「上賀茂がどんなところがよく分かった。」「今まで知らなかったことがよく分かった。」などであった。地元からは70数名の方々が協力してくれた<sup>56)</sup>。

15地点を解説した冊子「私たちの上賀茂」<sup>57)</sup>を作成し、9月に子どもたちに配付してもらった。11月には、子どもたちはラリーの経験などをもとに劇などの学習発表会を行ない、後日、検定を受けた。

優秀な成績で、子どもたちが大いに興味を持ったことが理解できた。ただ、次々と新しい試みの提案が地元の関連者から出されるが、それを実現できる人はおらず、何でも難しいことは著者に任せておけばよいとの雰囲気が出てきた。たとえば、著者としても時間の都合で全部を引き受けられなかったもので、上賀茂の農家で行なわれている祭の3分間程度の簡単な説明ですら、お願いしても断られた。著者が文章作って、それを読むのでなければ無理のようであった。全体を纏められるリーダーも出てこない状況であった。

また、伝建地区である社家町の説明に「社家とは上賀茂神社の神職の家筋を言います。」と冊子に記述したところ、「最近、社家がまた威張り出した。」とある集まりで農家から声が上がったので、社家についての説明は省かれた方が良いのではとの助言が上賀茂の長老の一人からあった。社家町の説明が出来ないとしてお断りしたが、農家が経済的に優位に立ったということで、最近では農家のご機嫌を伺わないといけない雰囲気が上賀茂地域にはあるらしい。

以上のようなことから、平成23年度は校長から依頼されて、著者しか出来ない冊子の改訂のみを引き受けた。ところが、校長の要望で小学校に預けておいた写真や説明文などは3年生のロッカーの上に放置されたままだったなど、小学校の学年引継ぎも十分には行なわれない状況となった。将来、小学校と地元で運営できるようになることを期待して、当面は静観することとした。ジュニア上賀茂検定自体は、子どもから若いお母さん方、地元住民にまで地元理解のための優れた手法であった。今後、各地で地域の実状に合わせたジュニア検定を試みたい。

#### 4. おわりに

上賀茂地域における10数年の活動でわかったことの一つは、リーダーの重要さであった。リーダーのいた活動は継続できたが、リーダーのいないあるいはリーダーを失った活動や組織は存続が困難であった。結局、リーダーあるいはリーダーになりうる素養の人を見つけられなかった地域では、如何なる活動も無に帰することになる。行事などのソフトの活動の困難さである。研究者は多くの場合、アイデアを出し行事を実施しても、同じ行事を何時までも続けていけないため、地域の中に引き継いでくれるリーダーを探さなければならない。リーダーが見つからなければ行事は消滅する。なお、行事などの活動をやり反響が大きかったとしても、継続しなければその影響は経験的に判断すると3年程度で忘れられると考えられる。必要ならば、別の行事などで関心をつないでいかなければならない。商業新聞による報道は積極的に依頼し、地域社会への浸透・広報に大いに役立った。

上賀茂地域でリーダーが育たない原因の一つは社家と農家の対立であり、この対立は今後100年経っても存続しているであろう。同様な対立は、江戸時代から続く農村地域だったところには多かれ少なかれ存在しているもので、上賀茂地域特有のものではない。たとえば、庄屋だった家と小作だった農家との未だに続く反目やわだかまりなどである。北大路魯山人生誕地石碑では、著者が社家と農家の間に介入し奔走することによって形の上では両者の連名という上賀茂地域はじまって以来の画期的出来事となったが、著者のような第三者がいなければ今後も無理である。ただ、著者が社家のK

氏の妨害を同族会の支援を得て抑えたことは、同族会の方々からも好感を持って評価されている。今後は、上賀茂の一部の社家の人たちが未だに抱えている「自分たち社家の上賀茂地域を支配しているリーダーである。」との幻想から来ている傲慢な我がままはある程度は抑えられるであろう。同族会の中の良識ある層が育つことが期待される。一方で、戦後の農地解放によって経済的に優位にたった農家の一部の人たちは、かつての社家のように上賀茂地域を支配しているのは自分たちだと思い出したようである。

ソフトの活動に比べて、ハードの活動成果は実現までに人間関係や資金面などで多くの困難を伴うが、長期的に存在して地域や社会に影響を与え続けていけることが長所である。完成すれば、その後は地域にリーダーも必要がない。たとえば、賀茂季鷹歌碑や北大路魯山人生誕地石碑である。上賀茂での観光のポイントとして社会に認められているし、上賀茂出身の人物への社会の理解を深めている。行事を他人や他グループなどに横取りされたり、真似されたりし難い点でもソフトの活動より優れている。

上賀茂地域での住民との協働による地域の活性化は、賀茂文化研究会の立ち上げなど一定の成果を挙げたと考えている。とくに、子どもたちを育てるということでは、上賀茂の住民では出来ない貢献をした。上賀茂地域での一連の研究活動は、平成22年に日本水環境学会関西支部から「賀茂地域における川を軸とした地域活性化に関する研究」として関西水環境賞を受賞した。今後は地域の形態が異なる下鴨地域での活動および全国の賀茂地域への活動に移行し、新たな知見を得るとともに今までの研究成果の普遍性を考察する。

本研究は、京都産業大学総合学術研究所の特定課題研究(E1015)、および科学研究費(22510049)の助成を受けている。

## 参考文献

- 1) 京都市都市計画局「上賀茂(町なみ調査報告)」、昭和53年3月
- 2) 京都新聞「明神川と社家町の今昔浮きぼり」、平成11年11月30日
- 3) 京都産業大学勝矢研究室編「明神川とのかかわりを軸とした上賀茂社家町界隈の生活の変遷」、平成11年3月
- 4) 京都産業大学勝矢研究室編「上賀茂の暮らしの今昔」、平成14年5月
- 5) 毎日新聞「明神川の整備保存訴え」、平成14年7月14日
- 6) 京都新聞「社家の土堀崩壊危機脱す」、平成15年4月10日
- 7) 勝矢淳雄、河野勝彦、齋藤萬之助、久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂文化の保全・継承とその展開」、京都産業大学総合学術研究所所報 第1号、103~121、平成15年8月
- 8) 毎日新聞「上賀茂の伝統文化を守ろう — 京産大でシンポ —」、平成15年10月26日
- 9) 京都新聞「上賀茂の文化再発見 — やすらい花披露も —」、平成15年10月26日
- 10) 京都新聞「上賀茂の歴史と文化紹介 — 地元の研究会が会誌創刊 —」、平成16年9月4日
- 11) 京都新聞「七夕祭復活 — 健康や平和短冊に願い —」、平成17年8月14日
- 12) 毎日新聞「火縄銃実演も — 百数十年ぶりに上賀茂神社七夕祭 —」、平成17年8月14日

- 13) 京都新聞「京日記」, 平成 22 年 8 月 29 日
- 14) 下鴨の文化を子どもたちに伝える会(代表 中島正子)編「親と子の下鴨風土記」, 平成 3 年 3 月
- 15) 勝矢淳雄「地域の特性を生かした環境学習と地域の連携」, 環境衛生工学研究, 第 15 巻, 第 3 号, 127-129, 平成 13 年 7 月
- 16) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齊藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおいた社家と明神川に関する環境学習の展開」, 京都産業大学総合学術研究所研究成果論文報告集(勝矢淳雄編「京都の活性化を目指した水環境と生活文化に関する調査とその展開」), 4~13, 平成 14 年 3 月
- 17) 勝矢淳雄, 河野勝彦, 齊藤萬之助, 久力文夫「バイオリージョナリズムに基礎をおく社家と明神川に関する環境学習」環境技術, Vol.32(No.3), 61~68, 平成 15 年 3 月
- 18) 勝矢淳雄「バイオリージョナリズムに基礎をおいた上賀茂文化に関する環境学習」, 環境衛生工学研究, 230~235, 17(3), 平成 15 年 7 月
- 19) 京都新聞「落書きに泣く社家の土壁」, 平成 11 年 11 月 25 日
- 20) 京都新聞「地元の「社家」を見学 — 建築法や歴史を学ぶ —」, 平成 13 年 8 月 8 日
- 21) 京都新聞「社家っておもしろい」, 平成 14 年 8 月 9 日
- 22) 読売新聞「地元の文化に親しむ — 児童ら社家を見学 —」, 平成 14 年 8 月 13 日
- 23) 毎日新聞「伝統的「社家」を知って — 地域の子供に見学会 —」, 平成 14 年 8 月 9 日
- 24) 京都新聞「社家町の風情実感」, 平成 15 年 6 月 30 日
- 25) 読売新聞「児童が社家見学 — 京産大教授と学生が案内 —」, 平成 15 年 6 月 30 日
- 26) 毎日新聞「児童らが社家見学 — 地域の歴史に親しむ —」, 平成 15 年 7 月 1 日
- 27) 京都新聞「洛中洛外 — 社家見学会が開かれた —」, 平成 17 年 6 月 25 日
- 28) 京都新聞「児童が古式泳法に挑戦 — 初プール開きに歓声 —」, 平成 15 年 6 月 25 日
- 29) 京都新聞「初の一般公開でアピール — 京の文化財「社家町」残そう —」, 平成 14 年 12 月 2 日
- 30) 朝日新聞「神職の住まい格式体感 — 上賀茂神社の社家「梅辻家」初公開」, 平成 14 年 11 月 24 日
- 31) 読売新聞「市指定有形文化財梅辻家を特別公開」, 平成 14 年 12 月 8 日
- 32) 毎日新聞「社家, 梅辻家初の一般公開」, 平成 14 年 11 月 24 日
- 33) 京都新聞「社家の書院趣を間近で — 梅辻家住宅を一日特別公開」, 平成 15 年 11 月 15 日
- 34) 京都新聞「梅辻家住宅秋に流れる江戸の風情」, 平成 16 年 11 月 13 日
- 35) 京都新聞「市文化財の梅辻家住宅, 12 日に特別公開」, 平成 17 年 11 月 10 日
- 36) 京都新聞「伝統文化・景観守れ」, 平成 15 年 10 月 23 日
- 37) 勝矢淳雄, 齊藤萬之助「上賀茂地域におけるバイオリージョナリズムに基づく地域研究とその展開」京都産業大学総合学術研究所報, 91~100, 第 2 号, 平成 16 年 8 月
- 38) 勝矢淳雄「バイオリージョナリズムに基づく上賀茂地域での民学連携による地域活動の展開」, 京都産業大学総合学術研究所報, 4 号, 55~66, 平成 18 年 7 月
- 39) 勝矢淳雄「上賀茂地域の活性化を目指した賀茂季鷹の歌碑建立の取り組みに関する考察」, 京都産業大学総合学術研究所報, 第 5 号, 37~48, 平成 19 年 7 月
- 40) 勝矢淳雄「賀茂季鷹の歌碑建立の取り組みによる上賀茂地域の活性化と環境保全に関する考察」, 環境衛生工学研究, 第 21 巻, 3 号, 167-170, 平成 19 年 7 月
- 41) 京都新聞「賀茂季鷹歌碑建立へ — 地域の誇りに —」, 平成 17 年 8 月 25 日
- 42) 京都新聞「地元ゆかりの歌人・賀茂季鷹しのぶ — 北区で上賀茂の文化語るシンポ —」, 平成 18 年 10 月 8 日
- 43) 京都新聞「賀茂季鷹の歌碑, 完成 — 自筆の作品刻む —」平成 18 年 9 月 29 日

- 44) 京都新聞「上賀茂の文化学ぶりレー講義 — 8日から京産大で一般にも公開 —」, 平成18年4月4日
- 45) 勝矢淳雄「魯山人生誕地石碑建立における住民合意過程に関する考察」, 環境衛生工学研究, 第22巻, 3号, 199-202, 平成20年7月  
勝矢淳雄「北大路魯山人生誕地石碑建立における合意と反対に関する考察」
- 46) 環境衛生工学研究, 第23巻, 3号, 192-195, 平成21年7月
- 47) 勝矢淳雄「上賀茂地域の活性化を目指した住民との協働に関する研究」, 京都産業大学総合学術研究所報, 第6号, 21~38, 平成23年7月
- 48) 読売新聞「魯山人の生家跡 石碑除幕」, 平成21年3月23日
- 49) 毎日新聞「生誕地に顕彰碑が完成 北大路魯山人没後50年」, 平成21年3月23日
- 50) 京都新聞「魯山人の業績たたえ石碑」, 平成21年3月23日
- 51) 京都新聞「糺の森の魅力 図鑑で身近に」, 平成19年8月25日
- 52) 京都新聞「糺の森で子ら自然観察」, 平成21年8月4日
- 53) 勝矢淳雄, 米澤信道「糺の森を探検しよう! (糺の森自然観察図鑑)」, 賀茂文化研究会, 平成20年1月
- 54) 勝矢淳雄「住民との協働によるジュニア上賀茂検定に関する考察」, 環境衛生工学研究, 第24巻, 3号, 67-70, 平成22年7月
- 55) 勝矢淳雄「上賀茂地域の活性化を目指した住民との協働によるジュニア上賀茂検定に関する研究」, 京都産業大学総合学術研究所, 第7号, 印刷中
- 56) 京都新聞「児童対象に上賀茂検定 まず名所ラリー」, 平成22年7月9日
- 57) 勝矢淳雄「わたしたちの上賀茂」, 賀茂文化研究会, 平成23年8月



# Study on the Environmental Learning aimed for Succession and Development of Traditional Cultures at Kamigamo Area

Atsuo KATSUYA

## Abstract

The Kamigamo area is older than Heiankyo, and there is the history more than 1,300 years. In the case of the Heiankyo removal as the capital, Kamigamo Shrine was placed with north defense, and veneration from the Imperial Court was thick, too. Many cultural events have been handed down to the Kamigamo area. However, the local community begins to be weakened under the influence of recent housing estate and declining birthrate, and the maintenance of the cultural events gradually becomes difficult. For traditional culture succession and the local environmental maintenance and local activation, the author carried out various kinds of environmental learning activity in Kamigamo area for ten several years. One of what I understood through these activities was importance of the leaders. If there is not a leader, the activity of the software becomes extinct. And I was not able to find that I brought up a leader in the Kamigamo area. One of the causes that a leader does not grow up at Kamigamo area is Opposition of Shake and the farmhouse. And it is expected that this opposition continues even after 100 years. Shake and association of self-government society erected a birth place monument of Rosanjin Kitaoji by a joint signature. This was an epoch-making event since Kamigamo area began. However, I will be difficult in future if there is not the third party like the author.

The activity of the hardware is accompanied by much difficulty by human relations and the acquisition of the fund for the realization in comparison with activity of the software, but it exists in the long term in the area, and it can continue affecting the society. In addition, the reader is not necessary for the area after completion, too.

The author contributed to local activation by the collaboration with inhabitants in the Kamigamo area. Particularly, the author did big contribution for bringing up children. It was not to be able to do it in the local inhabitants. I will develop activity to shimogamo area and Kamo areas in the country.

**Keywords:** Kamigamo Area, Activation of Community, Environmental Learning, Succession of Culture, Cooperation with Inhabitants